View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

ジ術・持続洗浄を行った。発熱が持続し、第 1 病日に分離されていた MRSA の VCM の MIC が 2 μg/ml であったため、DAP 5 mg/kg/day に変更。第 40 病日に血液培養再陽性となり、DAP 低感受性株と判断し、リネゾリド（LZD）に変更した。第 61 病日に再上行弓部大動脈置換術施行後、現在は LZD、クリンダマイシン（CLDM）で加療し経過良好である。

【結果】 本症例から検出された MRSA 株の DAP と VCM の MIC を CLSI に準じた微量液体希釈法（microscan：シーメンス、フローズンプレート：栄研化学）、E-test で計測した。結果は MRSA 菌株の DAP、VCM MIC は各種検査法でそれぞれ経時的に MIC 上昇を認め、DAP 低感受性、VCM 低感受性を示した。

【考察】 DAP 低感受性 VISA 感染症を経験した。本症例は難治性感染症（人工血管感染）、VCM 連日投与、外科的介入の遅延、不十分な DAP 投与量といった DAP の MIC を上昇させる要因を多く含んでいた。耐性リスクを低減させるには、DAP 高用量用法で治療を行うことや、MRSA 難治感染症例であると判断できた時点で、可能な限り早期外科的介入が必要であったと考えられた。

P3-54.

経過中にループスアンチコアグラントが検出された後天性血友病の 1 例

（臨床検査医学科）
○備後　真登、近澤　悠志、丹羽　一貴
村松　　崇、清田　育男、四本美保子
大瀧　　学、萩原　　剛、山元　泰之
鈴木　隆史、天野　景裕、福武　勝幸

【緒言】 血液凝固第 VIII 因子に対する自己抗体（第 VIII 因子インヒビター）が原因で発症する後天性血友病 A はまれではあるが致命的な出血傾向をきたす疾患であり、一方ループスアンチコアグラント（LA）は動静脈血栓症に関連することがある。第 VIII 因子インヒビターと LA の共存は、過去の文献上でも非常にまれである。我々は今回、後天性血友病 A の臨床経過中に LA が検出された症例を経験したのでここに報告する。

【症例】 75 歳、男性。胸痛と左上肢の腫脹で近医を受診し、採血検査で Hb 4.4 g/dl と著明な貧血を指摘された。凝固検査ではプロトロンビン時間は正常であったが活性化部分トロンボプラスチン時間（aPTT）は 93.8 秒と著明に延長しており、精査で第 VIII 因子活性が 1.9%、第 VIII 因子インヒビターが 16.3 BU/ml であり後天性血友病 A と診断された。後天性血友病 A に対して PSL 1 mg/kg/ 日で免疫抑制療法を開始し、出血症状（右血胸、背部巨大血腫など）に対してはバイパス止血製剤の投与を適宜行った結果、第 VIII 因子インヒビターの消失と合わせて第 VIII 因子活性も上昇し、出血症状も改善した。しかし aPTT の延長（60-70 秒）は持続したため患者血漿を用いて aPTT クロスミキシング試験を行ったが、完全には補正されなかった。aPTT 延長の精査として抗リン脂質抗体検査を追加した結果、抗カルジオリピン抗体と抗カルジオリピン・β2 グリコプロテイン I 複合体抗体は陰性であったが、希釈ラッセル蛇毒時間法で LA が陽性となり、遷延する aPTT 延長の原因は LA であると考えられた。

【結論】 後天性血友病 A 患者で LA が検出されることは非常にまれであるが、臨床的な出血症状と凝固検査に乖離を認める場合は、後天性血友病 A に対する過剰な免疫抑制治療を避けるためにも LA を鑑別診断に入れる必要がある .

P3-55.

薬剤溶出ステント留置後 FFR を予測する因子（多施設、前向き研究）

（内科学第二・厚生中央病院　循環器内科）
木村　　揚
（内科学第二）
田中　信大、山科　　章

【背景】 FFR は血行再建の適応評価に加えて、PCI 後の効果判定においても有用なツールであるといえる。また、DES 留置後 FFR とその後の冠動脈イベントのみならず、脳心血管イベントの発生頻度と相関すると推測される。しかしながら血管造影所見、IVUS 所見を用いて最善と考えられる DES 留置後においても、FFR を至適なレベルまで改善できない例が少なくない。

【目的】 DES 留置後において FFR が十分改善できない背景について解析する。

【対象】 2012 年 1 月より 2010 年 12 月までの、血